

新任役員



鈴木浩明 会長



渡辺喜久 東海ブロック長



平井雅之 副会長



村松英夫 監事

新会長挨拶

素晴らしき教え語り継ぐ



昭和59年度海外課程ブラジル班修了

鈴木浩明

皆様、こんにちは。平成30年11月24日産業開発青年隊創立65周年記念大会同窓会総会にて、次期同窓会長にご指名頂きました鈴木浩明でございます。

まずは、総会でお話しさせていただきましたように、青年隊とのかかわりを今一度、記載させていただきましたと思います。

大正3年、祖父、芦沢順治は山梨県南巨摩郡富沢町徳間にて生まれました。

戦前は川崎にて製缶の仕事を行い、40人程度の職人の責任者としてガスタンク等の施工をしていたそうです。

戦中は、兵役につき、中国に二回出征したそうです。当時としては、体が大きく、身長170㎝程度ありました。そのため騎馬隊として出征したようです。

戦後は、下駄の行商をしていましたが、下駄の時代は終わると考え、いろいろ

転職を考えていたようです。

昭和28年に芦沢管工を立ち上げました。そして、昭和32年に富士宮市（旧芝川町）柚野地区の水道本管布設工事を受注しました。当時は、水道関係のゼネコンが本管工事を受注していたようですが、地元の有力者に同郷の方がおり、その援助により受注することができたそうです。その時に役所側の担当者が、私の父、鈴木明男でした。総延長10㎞以上の本管布設工事で、実績のない地元業者が落札したということで、父は完工できるのかと心配していたようです。

当時の工事の話を聞くと、すべて人力で行い、ダンプの代わりにもっこ、バックホウの代わりにスコップで掘削工事をしていたそうです。すべて出来高制でもっこによって土砂を運んだ時には、1往復するとそ

のたびに、人夫にチケットを渡し、その枚数に応じてお金を渡していたそうです。人夫として働く人は、地元柚野、西山地区の方を雇っていたそうです。

昭和34年2月より富士宮市でも直営工事制度より出入業者制度を採用することになりました。そのことがあり、私の父に、一緒に会社を盛り立ててもらいたいと話をしたのだと思います。そして祖父の一人娘であった私の母と結婚し、芦沢管工に専務として仕事につきました。そして昭和38年に9業者が集まり富士宮市水道指定工事人組合を設立、初代組合長に、私の祖父芦沢順治がその任につきました。そしてその中に富士宮市の建設会社岩崎建設がありました。当時は富士宮市で一番大きな会社であったようです。

その岩崎建設が、中央訓

練所の本館工事を受注しました。そして、根原水源より根原集落そして、中央訓練所までの水道工事を祖父の会社で請け負うことになりました。掘削は、青年隊員が行い、配管を行ったようです。この工事もたぶん、延長7〜8㎞はあったのではないのでしょうか。当時の話を以前に聞いたことがあります。3インチの鋼管にねじを切るのですが、今は、優れた電動機械がありますが、当時は人力でねじを切ったそうです。3インチの鋼管を手動の機械を使ってねじを切るのは、大変な仕事で、たぶん3〜4人がかりだったのではないのでしょうか。寒い時でも汗をかいて仕事をしたと聞いています。

岩崎建設は、その後、倒産をしたそうです。その後の工事については、岩崎建設の保証人となっていた富士市の井上建設が継続で受

注したそうです。それが、中央訓練所本館工事とのかかりです。

その後、昭和47年、48年に千頭の水源地と中央訓練所の受水槽と連結する工事。そして昭和59年ボイラーの改修工事を建設省より請け負いました。その後、営繕関係は全て、任せていただけるようになったようです。

その間、昭和43年に私の父は、交通事故で亡くなり、昭和48年に祖父もなくなり、母の弟の叔父が後を継ぎました。社名もアンザワ設備と変わりました。

私は、平成1年に4年間指導員として務めさせていただいた技術協会を退職させていただき、アンザワ設備に入社しました。

平成8年に中央訓練所が閉鎖となり、富士教育訓練センターに移管するときに、改修工事がありましたが、その時には、望月建設が元

請け、赤池鉄工建設が下請けで工事を受注し、その時には他の業者が施工をしたようです。しかし、その後も営繕関係の仕事は、施工させていただきました。

平成10年ころ、春の時期に水が足りなくなり、夜間入浴用の水が足りなくなるということが頻繁に起こりました。そのため受水槽の増設ができないかという相談があり、設計施工させていただきました。また、研修中に水道管を破損するこゝろが何度か発生し、施設内の配管ルートがわからないかという相談があり、残された図面をもとに、施設内の設備図を作成しました。これは、今回の新築工事でも大いに役に立ちました。

そして、平成13年、根原用水を井戸に変更したいという要請があり、設計施工させていただきました。

平成15年に、叔父が設備

の仕事を辞め、新事業に移行するということで、私が現在の、有限会社富士秀工業を立ち上げ、設備部門を継承することになりました。平成16年叔父がなくなりアンザワ設備は、50年の歴史に幕を閉じ解散いたしました。その後、合併処理浄化槽の設置工事を受注させていただきました。

そして数年前の、豪雪の時、雪の重みで寮室の屋根が下がるということが起こりました。研修生が入寮するというので、何かあってはいけないということで、その対応に協力させていただきました。わずかな期間しかないということで、業者の選定などいろいろ大変でしたが、4月の研修開始前に間に合うことができました。

このように、私の祖父と中央訓練所とのご縁、私の青年隊、そして技術協会と

のご縁があり、現在も私が青春時代に素晴らしい教育を受けられたことのできた青年隊の跡地である富士教育訓練センターの施設管理にさせていただけることに感謝申し上げます。また、その延長で、青年隊の同窓会長に任にさせていただくことについても感謝申し上げます。

今後、青年隊の同窓会活動を充実したものにするためには、会員の皆様よりいろいろな情報を、収集、編集し、会報として情報発信をすることが大切なことであり、続けていかなければならないことだと思っています。できる限り多くの回数で会報を発行できればと考えています。そのためには、多くの情報が必要になりますので、事務局のほうにさまざまな情報を頂きますよう、どうかご協力お願いいたします。

たとえば、同期会や、ブロックでの同窓会を開催したときにはその情報を頂ければありがたいです。また、いつ同期会、同窓会を開催するという情報でも結構です。そして同窓会の皆様の近況、仕事のこと、青年隊の時の思い出など、なんでも結構ですので情報を頂きたいと思います。

また現代は、インターネットの時代です。青年隊同窓会のホームページを立ち上げ、多くの皆様方に活動状況を知っていただければと思います。ただしこれには費用がかかりますので今後、役員や事務局の方々と相談させていただき、実行できるかどうか検討させていただきたいと思います。

この5年間を皆様方のご協力のもと活動していきたいと思います。

よろしく願いいたします。最後に、長沢先生の句

「富士の如く美しく雄大に
尊厳なれ」

吉留先生がよくつかわれた句

「散る桜 残る桜も 散る桜」
富士がいつも見ているぞ。
恥ずかしくない人生を歩もう。

そして、私たち同窓会は、後輩が入ることはない。このままではいつか途絶えてしまう。私たちは、人生の中において一番感化されやすい時期に素晴らしい教育を受けることができた。恩師に感謝し、同胞とともにこの大切な教えを、なんとかして引き継ごう。命は儚い。いつかは命途絶えてしまう。しかし、最後の一人になるまで、この素晴らしい教えを語り継ごう。

このように恩師二人は、私たちに対し、激励をしているのではないのでしょうか。どうぞご協力お願いいたします。

記念講演



命を掛けて、未来を育てる (DVD収録)

講師 大久保俊輝 産業開発青年隊中央隊修了 元小学校長
現：亜細亜大学特任教授、文教大学非常勤講師

課題を持つ子どもと教師を目指す学生を率いて5泊6日の富士山体験を15年継続し、無事故で頂上を制覇した子どもは、延べ500名を超えます。幼稚園児から高校生まで半数は、不登校、半身不随、ダウン症他、なぜそこまでして継続するのか。それは、校長時代に自分の息子が次々と不登校に…世界に蔓延する自殺する青年達、その危機を救うのは、私達の命懸けの共育でしかないと気が付かせてくれたのです。

《講師略歴》

産業開発青年隊中央隊修了、昼間働き夜学へ、通信教育で教員免許取得。松戸市、我孫子市の小学校教諭を経て、船橋市、鎌ヶ谷市の小学校校長を歴任。葛南教育事務所主席指導主事（不登校支援教員派遣）校長定年後、県総合教育センターにて新任校長育成、組織マネジメント研修統括 東京都副校長研修講師 大学より「いじめ対策」でドイツ国へ派遣他 認定こども園おひさま顧問 ◆キャリア教育、不登校、非行、発達障害、ゲーム依存対策専門スーパーバイザー 相談件数述べ2千ケース

《実績》

平成26年度県教育功労者表彰受賞など多数 平成28年度天皇皇后両陛下太子拝謁・地域再生・高齢者支援のための薬膳料理専門店経営月2千名のお客様in新松戸駅）・老健、医師会、東京医科歯科大開業医の会、不登校、DV、LGBT講演。

1. 青年隊の実施機関及びその期間

(1). 建設省

- ① 青年隊は「建設省設置法」に「産業開発青年隊に関する」と規定された建設省の事業として設置され、それを受けて「1道11県（返還前の沖縄を含む）」で地方隊が発足し、その後「12県」も実施。

- ・ 昭和33年～昭和37年
九州、中国、四国、近畿、北陸、中部、関東、東北の各地方建設局
- ・ 昭和36年～昭和44年
北海道開発局
- ・ 昭和37年～平成5年
中央訓練所

② 直轄事業として昭和33年に「海外移住要員の技術訓練」を主な目的として「関東、中部地方建設局」に中央隊を設置し、その後「7地方建設局」にも設置。

③ 中央隊とは別途に、「北海道の開発に必要な技術者の育成」を目的として北海道開発局に青年隊を設置。

④ 昭和37年に各地方建設局の中央隊は中央訓練所として統合され、更には訓練の充実をはかるために幹部隊員の訓練も始まった。

⑤ 目的は我が国の戦後復興の進捗と経済発展に伴って当初の「農家の二・三男坊対策」色の強いものから、「国土開発のための技術者養成や開発途上国支援」へとシフトし、訓練期間も目的に対応するために「2年制～4年制」へ高度化された。

(2). 都道府県（昭和26年～）

- ・ 沖縄、宮崎、熊本、大分、長崎、佐賀、福岡
- ・ 山口、島根、岡山
- ・ 香川、愛媛
- ・ 和歌山
- ・ 富山
- ・ 静岡
- ・ 埼玉、群馬
- ・ 長野、新潟
- ・ 岩手、山形、福島、秋田
- ・ 北海道
- ・ 現在も継続している都道府県は、沖縄、宮崎。

2. 青年隊の派遣活動

(1). 国内開発及び災害復旧への派遣

- ・ 昭和38年
急派遣
北陸地方建設局管内に豪雪対策緊急派遣
- ・ 昭和42年
： 沖縄県宮古島に台風災害後旧派遣
- ・ 昭和45年～47年
： 返還された東京都小笠原諸島の開発に派遣
- ・ 昭和46年～50年
： 東京都伊豆諸島の利島村の開発に派遣
- ・ 昭和49年～53年
： 返還された沖縄の開発に派遣
- ・ 昭和50年～52年
： 高知県内の台風災害復旧に派遣
- ・ 昭和50年～平成1年
： 国内地方自治体の開発に派遣
- ・ 昭和53年
： 鹿児島県沖永良部島の台風災害復旧に派遣

(2). 海外移住のための技術訓練

- ・ 昭和31年～39年
： プラジル等への技術者移住の訓練
海外での派遣実践
- ・ 昭和51年～平成2年
： タイ、インドネシア、マレーシアへの実践派遣

(4). 開発途上国の国づくりに貢献できる技術者の育成

- ・ 昭和43年～平成2年
： 海外からの技術者研修受入れ

(5). 個人での活動

- ・ 青年海外協力隊への参加
- ・ NGO < N P O . ボランティア団体等の活動に参画
- ・ 海外移住

3. 青年隊の訓練概要

- (1). 「働きながら学ぶ」をモットーにしており、発足当初は文字どおりには建設現場で実習を兼ねて働き、夜に講義を受ける」というものであったが、その後も形を変えながらも「実践」を中心にした訓練が引き

継がれた。

- (2). 「友愛と団結」の精神や規律訓練を日々の生活のなかで培っていくために、全寮制の自治による集団生活であった。

- (3). 日々の早朝訓練で体操や駆け足、クラブ活動として武道等を行い、耐久訓練、富士登山等を年中行事として行った。

(4). 教育内容

- ・ 専門知識としての土木、測量、設計に関すること
- ・ 語学としての英語
- ・ 一般教養

4. 青年隊に関係する団体

(1). 社団法人 産業開発青年技術協会

- ① 設立 昭和41年8月

② 目的

産業開発青年隊の諸活動に関する協力及び産業開発に従事する青年技術者の技術の向上と養成援護をはかり、国土開発の推進に寄与するとともに、開発途上国等から海外建設研修生を受入れ、建設技術・技能の研修又は訓練を行い国際技術協力を尽くすことにより国際親善の実をあげること。

③ 事業内容

- 1. 産業開発青年隊活動の推進に関する諸事業
- 2. 海外建設研修生の受入れ及び研修又は訓練
- 3. 建設技術者及び技能者の養成並びに派遣に関する事業
- 4. 研修会、講習会等の開催
- 5. 建設技術に関する調査研究
- 6. 機関誌、その他の技術教育出版物の刊行、紹介、教材の作成
- 7. 地域産業開発及び開発途上国の地域開発に寄与する諸事業並びにこれらの受託に関する事業
- 8. 建設事業に関する調査、計画、測量、設計、工事監理等の受託
- 9. その他、協会の目的を達成するために必要な事業

④ 解散

平成3年4月1日、建設省による産業開発青年隊事業の見直しにより、「財団法人建設産業教育センター」に財産の総てを寄付し、財団法人に青年隊の発展を託して発展的解散を行った。

(2). 財団法人 建設産業教育センター

- ① 設立 平成3年1月～

② 目的

国内及び開発途上国の建設産業に貢献できる人材の養成及び確保を図り国内外の建設産業の健全な発展と国士づくりに寄与すること。

③ 事業内容

- 1. 国内の建設技術・技能者の養成
- 2. 海外建設研修生の受入れ及び研修
- 3. 建設分野における海外技術協力要員の養成
- 4. 国内外の建設技術・技能者の養成及び確保に関する調査研究

5. その他この法人の目的を達成するために必要な事業

- (3). 建設大学校静岡朝霧校(平成5年4月～平成8年3月)

5. 産業開発青年隊同窓会

- ① 昭和58年「設立時の目的からの転換時期に差し掛かってきた青年隊と、当時の(社)産業開発青年技術協会を修了者の立場から支援するため」に結成し、「修了者の交流と会報や名簿の発行、青年隊に関する助言や提言、図書等の寄付」等を行い、その延長として「隊員の実習や就職の受入れ、ブラジル移住者子弟の研修受入れ」等を行ってきた。
- ② 「升ノ内三郎」初代会長の後を受けて、「光森 徳雄」が会長に。
- ③ 60周年 栗田富夫が会長に就任
- ④ 65周年 鈴木浩明が会長に就任

寄稿 「最後の武人 吉留一利」 土橋 聡

昭和のはじめから平成の末まで、戦争と青年教育に人生の全てを捧げてきた「吉留一利」という人、それは青年隊関係者であれば誰も知らない人はいないであろう。

少し高い声音と言葉の端々に宮崎弁が入った話し方に温もりと、簡潔明瞭な話に無駄は無く、挨拶する姿勢は革靴の踵を揃え背筋を伸ばした姿勢から腰を引き上体を十五度程に下げ静かに起こす。

この所作は、誰に対しても同じであった。

青年隊出身者は勿論のこと、職員同僚の間でも「吉留先生」と呼び合い、この呼び方は生涯変わることが無かった。

それは教育者としての姿勢に皆が敬意を払い、また親しみを覚えたからであると思う。

吉留先生は、宮崎県小林市に生まれ、曾祖父は西南戦争にて戦死したと話されていたので歴史の在る家ではないかと思われる。

吉留先生の十代半ば頃は、国内並びに諸外国との国際関係がめまぐるしく変遷していった時であり、特に国内に於いては文官による政策に陰りを見せ、武官の聲が大勢を占め武をもって行う政策へと変っていく時代であったように思われる。

昭和十二年の盧溝橋事件をきっかけに日中戦争が勃発、これを期に昭和十三年国家総動員法が成立し、昭和十四年年ナチス政権下のドイツがポーランドへ侵入し、欧米各国を巻き込んだ対戦に進んでいった時代でもある。

年々国内の事情も厳しさを増し、昭和十五年になると「小麦粉・米穀・砂糖配給統制規

則」が交付され贅沢品禁止令も出される等、国民生活が破綻していった時代でもある。

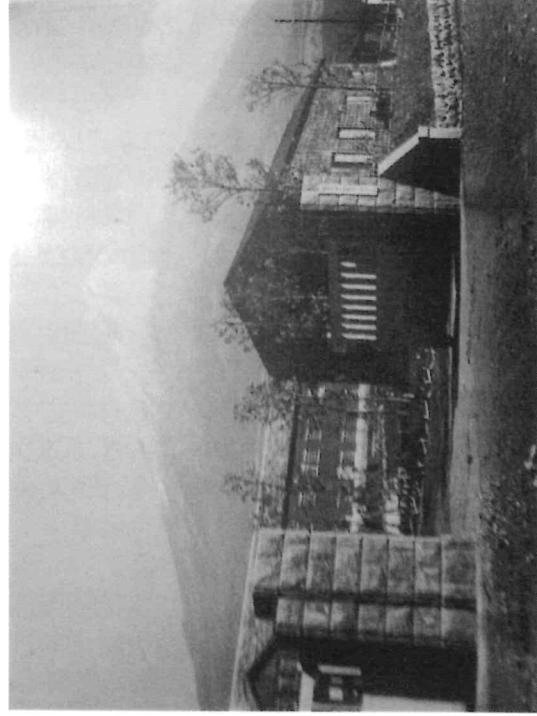
この頃の農村や都市において子供を上級の学校（旧制中学校）へ進学させられた家庭は、農村において約十%弱、都市では四十%弱で経済的に恵まれた家庭に限られており、受験戦争ということもなく極限られた階層間の問題であったようである。

始どの少年達は能力の有無に関係なく、経済的要因から六年の義務教育を終えると、尋常高等小学校の高等科へ進学し、高等科卒業後は家業を手伝いながら「中学校講義録」現在の大学入学資格検定試験を受けて資格を取ったり、都会に出て官庁や会社の給仕をしながら夜間中学で勉強する者と、小学校の教員を養成する師範学校（官立で生徒の費用負担が軽かった）に進学したり、鉄道員を養成する鉄道教習所、郵便職員を養成する通信教習所（両所とも全て官費で給料も支給）へ受験する道を選ぶ人もいたようである。また普通文官、警察官を目指したり、陸海軍の職業軍人を志す者も多くいたようである。

海軍では昭和四年より予科練習生制度が設けられ昭和五年より教育訓練が行われている。将来航空特務士官の素地を身につける事を目的とし、高等小学校卒業者で満十四才以上二十才未満の青年募集が始まり、陸軍では職業軍人を目指す青少年を対象に十八才からの志願兵制度があったが、どちらかといえば陸軍は徴募兵で兵員を補充し、志願兵は下士官要員に充てていたようである。

陸軍では、その後飛行機や戦車、通信器機など兵器の技術が年々近代化されることに伴い、これらの兵器を扱うためには一般の徴募兵では間に合わなくなり、優秀な者を多数集めるため、採用年齢を十八才までとし、少年時代から育てるようにしたものと思われる。

吉留先生は、この時期に志願し陸軍少年戦

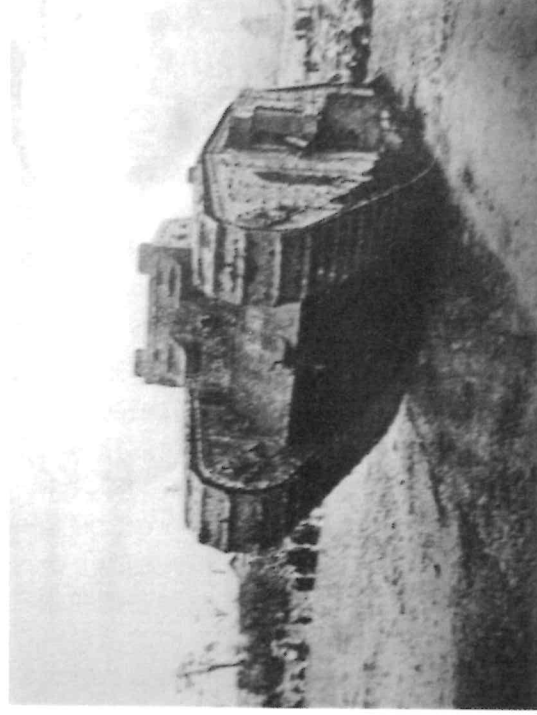


陸軍少年戦車兵学校 正門（昭和17年）

車兵学校で、二年間の教育訓練を受け戦車兵として大東亜戦争に参戦することとなる。

我が国の戦車の歴史については、第一次大戦の大正五年、イギリス軍の開発した戦車が戦場に初めて登場し、日本の陸軍がこれに注目して、大正七年イギリスよりA型十二ト戦

車とフランスよりルノー六ト戦車を輸入し、同国将校より取り扱い操縦を習い、戦術面においては、堅固な野戦陣地の攻撃に使用することとし、歩兵隊に配備されることとなった。



第一次世界大戦に使用されたイギリス マークI戦車 (実用世界初)

大正十四年に戦車隊を設け輸入戦車十数両で満州事変より使用されたようである。

しかし当時の戦車は速度も遅く、故障が多々あり「鉄牛」のあだ名が付くほど実践では活躍の場が少なく、戦車の国産化も自動車工業技術が黎明期とも言うべき時であり、当面は輸入製の車両に頼りながらも、開発を併行して行う状況であった。

昭和二年には試作品が出来上がり、昭和四

年に改良を重ねた実践用の八九式中戦車が完成する。

昭和十年には、従前より使用されてきた主力エンジンが水冷式ガソリンエンジンであったため、火気に弱く、寒地での支障も多々有り、これに換わるエンジンの開発を進めた結果、空冷式ディーゼルエンジンの開発に成功し、九五式軽戦車から装備され、その後このエンジンを主力とした車両が開発されるようになった。

昭和十四年には満州国西域のハルハ河を挟んで蒙古・ソ連軍と、満州・日本軍（主に関東軍）との間でノモンハン事件といわれている大規模な戦闘（国境紛争で、満州国建国以来、蒙古との国境線で小競り合いが幾度か起っていたが、これは蒙古と満州国との国境線を定めていなかったことが原因であると思われる）が起こり、日本軍が大敗するという、明治以降戦勝を重ねてきた我が国にとって初めての出来事であった。

この年ソ連ではスターリンの東欧諸国併合という戦略を進めている最中で、西から東進しようとするドイツと、東に日本軍の脅威を抱え挟撃の狭間に立たされていたソ連は、先ず日本軍を叩き、日本の脅威を取り除いてから西進することとし、日本軍とは短期決戦で戦いを終え、九月から東欧諸国の併合を行う戦術を進めていた。

東欧諸国進攻の前哨戦として、兵員数は日本軍とほぼ同じ数を投入し、戦力面では、戦車・航空機共に日本軍の四倍近くを投入。八月に総攻撃を開始。

この戦いにおいて投入された戦車は日本軍九十二輛に対しソ連は当時最新鋭の性能（車

速だけでも比較してみると、日本軍の戦車は速度二十五㎞から四十㎞程度に対しソ連の戦車は時速五十㎞以上の速度）を有する四百二十八輛の戦車が投入され、この物量もさることながら同年八月のソ連大攻勢が開始されると第二十三師団が壊滅（兵力の七十五%を失う）するという軍事的大敗北を期した戦いであった。

日本軍の特に、白兵戦における兵士の防御戦闘能力の高さから決着にはかなりの時間を要した。

この時、スターリンは戦況とドイツの動向も捉えた中でこの八月「ソ連・ドイツ不可侵条約」の締結を行い、西からの脅威を取り除くことに大きな一手を講じていた。

関東軍はこの戦闘に申し合戦を行うべく新鋭兵力を注ぎ込む準備をしていたが、陸軍中央（参謀本部）では勝算は乏しいと判断し、主戦派幹部を入れ替え、日本側より東郷駐ソ大使が停戦を正式提議し、ソ蒙側の主張をほぼ全面的に受け入れ、九月十五日「日ソ停戦協定」を結び終結した。

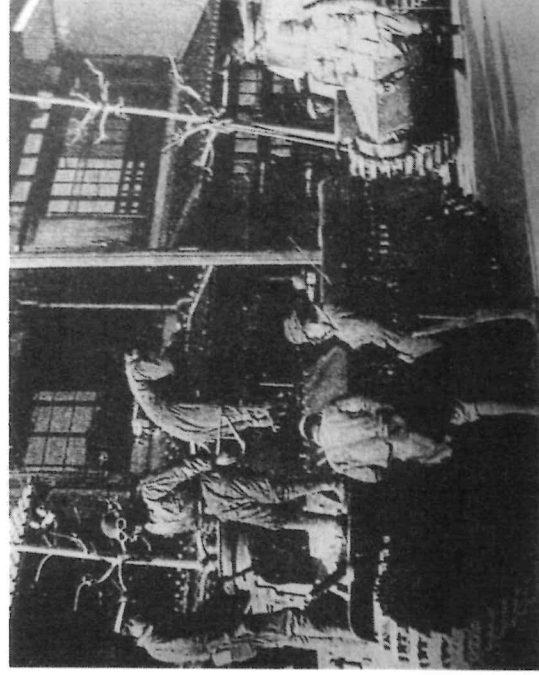
この戦いに於ける双方の死傷者は、日本が一万八千人程と戦車二十九輛、航空機約百六十機を失ったが、ソ連に於いては、死傷者約二万五千人、戦車二十五輛、航空機二百五十一機を失うという結果であった。

一方的に戦況を判断して日本側から停戦を申し込まれたソ連側は、日本側よりも被害が多いことを把握しており、戦力で優位に立っても、その戦闘能力の高さには脅威を抱いていた時でもあり、日本側からの申し込みは渡りに船となったようである。

この事件後、報告書が出され評価と対応について「最大の教訓は国軍伝統の精神威力を益々拡充すると共に、低水準に在る我が火力戦能力を速やかに向上せしむるにあり」と、従前の歩兵・騎馬隊戦力を主と捉らえた精神威力が優先されていたようである。

しかし、火力戦能力の向上という点については諸外国より後れを取っていることに、多年に亘って近代化の検討がなされてきたが実現出来ない状況であったところ、これがきっかけとなって、戦闘能力の向上を目指すべく同年十二月から「陸軍少年戦車兵学校」が開校することとなった。

陸軍少年戦車兵学校は千葉市黒砂町にあった陸軍戦車兵学校内に、少年戦車兵学校を昭



調整行軍中に整備を行う少年戦車兵

和十四年に設立し、同年十二月第一期生を受け入れて教育訓練を開始する。

吉留先生は昭和十六年十二月からの第三期生で応募し、この時日本全国から十五歳以上十八歳未満の青年が、定員五百名に対し約二万名が応募、四十倍という難関を突破し合格。

昭和十六年十二月一日千葉市黒砂町にあった、陸軍戦車学校へ入校（当時千葉には当校のほか、歩兵・騎兵・野砲・重砲・高射砲・飛行などの連隊各校が集まり演習場も、各校、各校相互に使用を牽制され実弾射撃にも事欠く状態であったため、その後昭和十七年、静岡県富士宮市に移転、施設敷地面積二十万坪、演習地は朝霧高原を含む広大な敷地を使い戦車約七十両、自動車十台を配備し教育訓練を行うこととなる）。

吉留先生が入校した一週間後の、十二月八日東条英機は、戦争やむなしの政治判断を御前会議において承認され、米英国に宣戦布告。

我が国が大東亜戦争（この表現は東条内閣が決定した日本の暦である事から表現したもので、戦後GHQから使用禁止令が出され、アメリカにとっては太平洋に展開した戦線であったことから太平洋戦争との表現になり、戦争そのものはヨーロッパに端を発し世界を巻き込んだ戦争として第二次世界大戦とも呼ばれる）へと突入したその時でもある。

この十二月八日戦車兵学校の状況は以下ようであった。

入校八日目の未明非常呼集のラッパで起こされた。

「非常呼集」不寝番が廊下を小走りに駆けながら、大声で叫んで伝えた。班長が帯革と

銃剣を吊りながら靴音高く飛んできて「服装は第一種軍装徒手、巻き脚絆、銃剣を吊って白手袋をして舎前に集合。その場で編上靴を履いて脚絆を巻いて良いから早くしろ」と怒鳴りながら階下に降りていった。

入校式の時に着た制服を着て、巻き脚絆をし、帯革を締め銃剣を吊り、舎前に駆け下りて行ったら、一年生は整列して番号をかけていた。

やがて一年生（二期生）の三ヶ区隊も集合完了。それぞれに区隊長に報告してその指揮下に入る。

各区隊長は中隊長に報告。全員戦車神社前に集合。

やがて玉田美郎校長（少将）が壇上に立ち生徒隊長が張りのある声で

「校長閣下に敬礼 頭中」

校長閣下の右手が軍帽の右庇の所にサツと上がり、整列した生徒の右翼から左翼に上体を回し、視線を移しながら答礼を返す。

校長閣下が答礼を終わり、正面に向いたときに生徒隊長の「直れ」の号令。

やがて閣下の厳粛な訓辞が始まった。

「我が陸海軍は、本日未明、南太平洋並びに南方各地に於いて、米英両国を中心とする連合軍と戦いを始めたり。諸君は、この非常のとき大御心を体し、一層の決意と自覚を高め、心身を鍛錬し、学業に励み、戦技を磨き、優秀な戦車隊幹部として完成するように、一層の奮闘を望む」

という宣戦布告の伝達式の状況であった。

さて、三期生は一ヶ区隊四十数名で、四ヶ中隊に三ヶ区隊ずつ入校し、上級生と下級生は同中隊で寝食を共にした。

区隊には二期生が指導生徒として一名が付き生活指導、つまり下級生の躰け教育を夕食後から朝食前まで起居を共にし、昼間は自分の区隊に戻って学科や術科など同級生と行動を共にしていた。

生徒の日課は、午前六時起床（冬季は六時三〇分）平服を着て舎前に集合、日朝点呼を受け、取り締まり生徒の指揮で上半身裸になって膚の摩擦、（夏冬同じ）、次いで体操と号令調整を実施。

体操後舎内に入って床を上げ整理整頓、室内の清掃洗面。

午前七時朝食。食事は当番が各区隊毎食堂に先行し盛り付け等を行い、区隊員は取り締まり生徒の指揮で、食堂まで駆け足で食べに行った。

午前八時十分服装検査。平服で書籍入れ袋に教科書筆記用具を入れて右脇に抱え舎前に集合し、週番士官の検査を受けてから取り締まり生徒の指揮で区隊毎それぞれの講堂に駆け足で向かった。

時間割予定表が週末に翌週の授業予定表を区隊に配られ、自習室と居室に掲示。講義には静大・横浜大・千葉大の教授なども加わり、軍事学・術科にはノモンハン事件の戦線にて実戦経験のある士官も教育に加わった。

学科は、普通学（国語・漢文・数学・物理・化学・工学・歴史等）と軍事学（作戦要務令・戦車操典・射撃・操縦・通信・整備・築城・銃・剣術等）術科（徒歩訓練・小銃訓練・自動車及び戦車の整備・自動車及び戦車の操縦・拳銃・小銃・戦車の機関銃・戦車砲の射撃訓練・戦車の戦闘訓練・車載無線機の操作・銃

剣術・手旗信号等）の場合は午前四時間授業、午後は三時間授業で午後四時に終わり、午後四時過ぎから五時までは自由体操の時間で、体操衣袴に着替えて器械体操や銃・剣道など思い思いに過ごす。

午後五時から入浴、午後六時夕食。午後七時から午後九時まで自習時間。午後九時、日夕点呼を行い午後九時三〇分消灯。

以上が通常の日課であったが、術科訓練や演習の場合は、午前午後通しの時もあり、深夜に及ぶ夜間演習を行う場合もあった。

平服の場合は、古い制服に肩章をつけない服装で、徒歩訓練等は制服に、帯革を締め銃剣を吊り、ゲートルを巻いた。

自動車や、戦車の操縦訓練は上下通しの作業服にゲートルを巻き、自動車の場合には戦闘帽、戦車の時には戦闘帽の上に戦車帽を被り、整備の時にはゲートル・銃剣を吊らないで帽子は作業帽を被った。

靴は編み上げ靴、運動靴、宮内靴があり、これら衣類・教科書・兵器などは全て官費で賄われ、月額四円の生徒手当でも支給された。

戦車に関する構造・整備・操縦・通信・砲術これら全てを一人で対処できる優秀な戦車幹部を養成することになり、こと操縦訓練に関しては厳しかったようで、乗車に始まり下車に終わる一連の訓練であった。

「乗車」の号令で、操縦手が第三車輪に左足をかけ戦車に登り、砲塔の天蓋を開けて素早く戦闘室に潜り込み、操縦席に着いてエンジン始動の準備をする。

次いで通信手が戦車に登り、砲塔横の天蓋を開けて通信席に着いて天蓋を閉める。

三番目は、一番砲手が砲塔天蓋から乗車。次いで二番砲手が乗車。最後に車長が乗って天蓋を閉める。

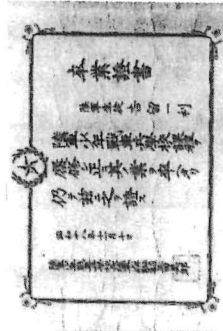
降車はその逆順で整列時の位置に戻る。これを一分以内で出来るよう、反復訓練を行い約一時間程度で出来るようになったそうである。

操縦訓練は、基本訓練と応用操縦訓練を行い射撃訓練と戦闘訓練などが並行して行われた。操縦手始めの頃は、操縦手後方に教官が中腰になって直接手ほどきを行ったが、技量の進行と共に車長の位置で「速度延ばせ」「止まれ」と号令し、その号令も声だけでは聞き取りにくいので、操縦手の体に直接伝える事を行った。

「前進」「加速」と車長は声を出しながら操縦手の背中を蹴り、「止まれ」「減速」は背中を押す、「右へ」は右側の脇腹を「左へ」は左の脇腹を押さえるという、命令と伝達における復唱後に動作する行為を省き、車長が声を出すと同時に操縦手の手足が動いているというような間の無い操作が求められ、戦闘教練になると「戦車経典」よりも実践内容に順処した「満州機甲軍操典」に基づいた教練

に多くの時間を充てていたようである。

戦いに於いての車輛行動の速さは、戦車砲の直撃をまともにも受けるか、掠めるかということであり、結果として搭乗員全員の生と死の分岐に関わってくるからである。



戦車操縦に求められた理想の最終目標は「人車一体」であった。

吉留先生は戦争の最中ではあったものの、予定された教育訓練を二年間受け、昭和十八年十一月十日卒業を迎える。

卒業前にはそれぞれが任地の希望を出し、それぞれの希望に基づいて配属先が決められていたようである。

概ね第一志望が南方派遣軍の戦車隊、第二志望が支那派遣軍、第三志望が関東軍で、内地部隊配属をことさら嫌ったようである。

吉留先生の配属先は、支那派遣軍と決まり、任地までの間に約一週間の休暇があり、下関に集合することとなった。

この赴任前、下関に於いてか、宮崎の妻家に寄る時間があつたのかどうかは分からないが、親と最後であろう挨拶を交わしたことが想像される。

先生からは、支那大陸の北支方面へ赴任したと聞いている。

戦地は北支から中支・南支まで転戦したそうである。

支那大陸の北では零下二十度以下の気候に、南に行けば戦車の甲板が焼け、直接膚が触るとやけどをするような気候となり、戦車内部は蒸し風呂状態で騒音も激しく、搭乗員にとっては苛酷な環境の中、転戦したようである。

特に北支へ配属になった冬場の演習では、演習が終わった後戦車の整備に追われたそうである。

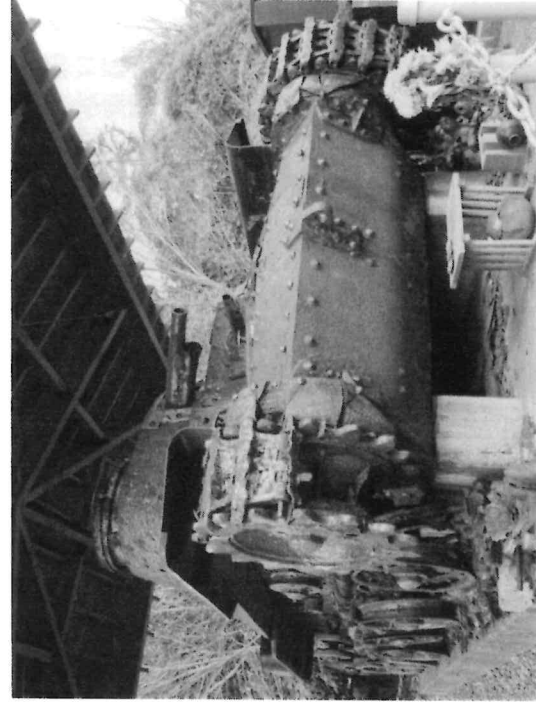
バッテリーを取り外し、オイルと燃料を抜き、キャタピラーと車輪の泥土の除去。

演習前には、凍った戦車のエンジン始動の

ため、戦車にシートを被せ、戦車の下からコンロに火を起し底板を暖め、ジリジリと底板に溜まった油が沸いてきたら、沸騰したオイルを補給し、そのオイルがエンジン部分に回るよう戦車の中に入り、一時間ほど二人がかりでクランクする。

戦車の中は油煙が充満して呼吸できないため、防毒マスクを着用。エンジンが少し暖まったところ、バッテリーを取り付け、燃料を補給しエンジンを始動する。

次にキャタピラーへ滑り止め防止のため釘を取り付ける。それから砲と銃、無線機の装備、弾薬、燃料、食料などを積載するという一連の整備作業が日常戦地で行われていたよ



戦時の旧日本軍主力戦車（九七式中戦車）

うである。

戦地での戦いについては、北支派遣軍隷下で、河南作戦に参戦したとのことである。

これは昭和十九年四月から十二月にかけ、戦車八百輜、自動車一万二千台、馬七万頭、総兵力、五十万人を投じて行われた戦いである。

戦車の天敵とされた米軍戦闘機を有する飛行場を奪取することが使命であった。

黄塵万丈の気象条件下、戦車の故障も多く戦車の天敵である爆撃機が頻繁に来襲し、道は米軍機に爆撃され、大穴が開いており、その都度工兵隊を要請し、修復作業を行いながら進撃する状況で、加えて、蒋介石軍のゲリラ活動が各地で活発化し、大変な困難を極めた作戦であったようである。

しかしながら目的の老河口飛行場付近において、戦車部隊正面作戦によって、敵飛行機とゲリラを釘付けにしている間、騎兵旅団が一気に飛行場へ突入、占領して作戦の目的が達成された。

この大東亜戦争の終戦をどのように志向すべきかと言うことは終戦直後の昭和二十年六月始めの天皇を交えた「御前会議」で公式には戦争継続（戦況からすると本土決戦である）が確認される。ただし極秘裏にソ連仲介での和平を探るという内容であった。

しかしソ連はアメリカから対日参戦を強く要望されており日本政府が仲介を決定した四ヶ月前の二月、ヤルタ会談に於いて対日参戦をトルーマンに約束し四月には日ソ中立条約の非延期も通達されており、ソ連が日本に有利な仲介をするということは考えられない情

勢であったはずである。

陸軍はソ連が対米国の戦略的必要上、日本が弱体化することは望まないであろうという読みと、この方策を強行に主張され押し切られてしまったようである。

ソ連は、先に記したノモンハンの紛争を冷静に分析しており、ソ連軍の弱点と日本軍の弱点、また強さの要因について当時の公式文書は、当然なことではあるがスターリン独裁体制を反映した「社会主義絶対的勝利」という美辞・賛辞がある中、スターリンに寵愛され一年後に参謀総長となったジューコフの公式報告書では、「砲兵と戦車は日本軍より優れていたが、日本軍の歩兵は白兵戦に優れ、特に彼らの操典とは矛盾はしているが防衛戦闘が得意である。一方、ソ連の歩兵は概して自立して戦う個人的技能が不足している」。

このような報告がされていたようである。

ノモンハンに於いては、日本より停戦を持ちかけられていなければ、戦況は戦力で太刀打ちできずに被害を多く被ることになり、ソ連の勝算はむずかしく、日露戦争の再来を想像させるのに充分であったのではないか。

日ソ中立条約に基づき終戦直後までソ連のスターリンは、対日戦に参戦することなく自国の武力を温存していたのである。

日本軍が連合軍との戦いに於いて出来るだけ消耗するのをじっと待ち、時機到来を見極めて一挙に打って出るという、いわば「夷を持つて夷を制する」と思われる狡猾な戦術を描いていたものと思われる。

従って七月、日本の特使として近衛派遣はソ連より拒否されてしまう。

ソ連にとっては講和の仲介を打診された段階で「日本国戦意喪失」という、待ちに待った情報を連合軍より早く得られたことになる。

後はいつの時点で対日参戦布告を行うかの、時間待ちであったはずである。

しかし八月六日広島への新型爆弾投下による情報を得た段階で、日本が早々に降伏という可能性が高く、対日参戦していないソ連にとっては時機を逃してしまうことになる。

八月八日ソ連は日本に宣戦布告し翌九日午前零時、怒濤の如く満州国・南樺太・朝鮮半島へと侵攻する。

日本政府は八月十四日、ポツダム宣言を受理したことを各国政府に通知し、八月十五日玉音放送にて国民に知らしめ、八月十六日には日本全軍に大命（大本営が全軍隊に対し、戦闘行為を停止する旨の命令）を通達し停戦させる。

しかし、ソ連のスターリンは正式な停戦文書を交わすまでは戦闘中であるという持論（伝統的な戦時国際法において休戦協定の合意は口頭による同意を得れば良く、文書の手交を要件としない）を大儀とし、その間日本の領土を少しでも多く占領するという戦略を推し進め、早期に千島列島を制圧した後、北海道に侵攻することを画策。

ソ連軍は、八月十八日未明、千島列島の占守島に上陸する。（面積は伊豆大島の約四・二倍）

当時の日本軍は、対ソ連迎撃部隊として千島列島最北端の占守島守備の任にあっていた戦車第十一連隊は、ノモンハン事件の反省から創設された部隊で将校・下士官ともみな

現役で士気きわめて高い部隊であった。

この上陸二日前の夜遅く、敗戦の報が入り戦闘準備を解くとともに、別命あるまで待機の状況にあった。

八月十八日午前二時ころ不寝番が「非常呼集」と叫んで各小隊に知らせ、下士官たちは何事が起きたか分からず、身支度を整え兵舎前へ集合すると、

「連隊長の命令。本未明、国籍不明の敵が「武田浜」に上陸。同地区のわが守備隊と交戦中である。連帯は直ちに出勤これを攻撃し、撃退せんとす。各隊は出勤準備出来次第、順次中隊長車に続行せよ。目標は天神山」。

各隊が天神山に午前五時頃到着した時点で、ソ連軍は内陸部の「四峰山」に到達しており、その数は次第に増してくるばかりであった。

一端は上陸地点近くまで追いつ返すものの、「武田浜」には橋頭保が築かれ、対戦車重砲を携帯した戦車部隊も陸揚げされると戦闘はソ連軍の圧勝に終わった。

この戦いで戦車第十一連隊は連隊長以下、少年戦車兵を含む九十六名の戦死者と、二十数輦の戦車を失っている。

戦後ソ連の資料によれば、占守島の戦闘に於けるソ連側の被害は、千五百六十七名日本側千十八名で、日本側よりも多くの死傷者数であったとのことである。

これによって、スターリンは千島列島武力占領の出鼻をくじかれたことになった。

その後ソ連軍は侵攻を緩めることなく、八月二十八日には、択捉島に上陸、九月一日、国後島・色丹島に上陸。

翌九月二日戦艦ミズーリ艦上にて連合軍